

公立小学校で日本語教育の専門性を活かす

—鈴鹿での実践—

中川 智子

要 旨

鈴鹿市は教育委員会が中心となり、日本語教育支援システムを構築している。鈴鹿での日本語教育担当としての実践を振り返り、JSLバンドスケールを活用した協働的な実践、子どもたちや周りの人たちとともに創ってきた日本語教育実践の発信を通して学んできたことについて述べる。

キーワード

協働 JSLバンドスケール ことばの力 実践の共有

1. はじめに

私にとって子どもの日本語教育の出発点は、タイの日本人学校で教員生活をスタートさせた頃に遡る。タイで暮らしながら学校では日本語で授業を受け、家に帰ったらタイ語で生活している子どもたちに出会い、ことばの面で苦労しながら学んでいることを知った。そのような子どもたちに必要なのはどんな取組なのだろう。

その後、私は早稲田大学大学院日本語教育研究科で年少者の日本語教育を学んだ。大学院では多くの理論や実践にふれ、JSLバンドスケールについて学んだり、子どもたちの「ことばの力」をどう捉えるかについて考えたり、今までの教員生活では考えたことのない視点で取組を見直すようになった。授業では学校や地域などに出向いて、実際に外国につながる子どもたちや様々な立場の方々と関わりながら日本語教育の実践を経験することも大切にされていた。積極的に実践の場を訪れるようにしていたが、大学院生の私が継続的により深く子どもや教職員に関わることは難しく、授業の中で学んだことや気づきを当時の実践に十分に活かすことはできていなかった。

2008年から鈴鹿市で教育委員会主導のもと全市的にJSLバンドスケールが活用されることになり、私は縁あって鈴鹿市の日本語教育に携わることになった。日本語教育コーディネーターや小学校の日本語指導教室担当として関わり、今年で13年目を迎える。大学院で学んだことや私自身の経験、周りの人たちの経験を取り入れながら手探りで実践をしてきた。ここでは現在所属する学校で日本語教育の担当として外国につながる子どもたちや保護者、教職員とともに積み重ねてきた実践から、専門家の養成や研修のあり方について考えたい。

2. 鈴鹿での実践

私は2017年度から鈴鹿市内のA小学校で日本語教育の担当をしている。校区は以前から外国人住民が住んでいることもあり、A小学校にも外国につながるのある児童が多く在籍している。国際的な視野をもって自分の考えを発信する力を身につけ、共に生きる社会をつくっていきけるよう、日本語教育や多文化共生教育にも力を入れている。A小学校でのJSLバンドスケールを活用した体制づくりの実践や在籍学級との学びのつながりに視点をおいた実践について報告する。

2.1 みんなで子どもたちの「ことばの力」をみる

鈴鹿市では2008年から外国につながるのある子どもたちの指導や支援を考えていく際、JSLバンドスケールを活用して子どもたちの「ことばの力」をみている。A小学校でも多文化共生教育担当や日本語教育担当が中心となって年度初めにJSLバンドスケールの意義について説明し、年間計画の中に位置付けて日本語教育体制を整えている。学校現場は毎年教職員の入れ替わりがあり、若い教職員も増えてきている。JSLバンドスケールの活用慣れない教職員もいるため、職員会議や研修の場を活用し、その都度丁寧に説明していくことが必要である。

私がA小学校の日本語指導教室で外国につながるのある子どもたちと関わって4年になる。A小学校の外国につながるのある子どもたちは半分以上が日本で生まれ育っており、その多くが学校生活では日本語でやりとりをしている。生活面で困ることは少ないように見えるが、学習面では日本語で考え、読んだり書いたりすることに苦労している子は多い。一方で初めて日本に来て生活する子どもたちも増加傾向にある。多様な成育歴の子どもたちが共に学ぶ学校で、在籍学級や日本語指導教室での授業を考える時には悩むことも多いが、JSLバンドスケールを活用しながら、授業の中で「子どもたちにどのような力をつけていくか」を考えている。

最近のJSLバンドスケールの判定会議では、担任、日本語指導担当、外国人教育指導助手、専科担当、非常勤講師、管理職といった子どもたちに関わる教職員が、約50人の子どもたちの日本語能力把握と今後の指導や支援について協議を行った。学年ごとに話し合う場を設定し、日本語能力把握と今後の指導・支援について協議する。私も日本語教育担当として全学年の判定会議に参加した。判定会議では在籍学級や日本語指導教室の様子だけでなく、専科の授業での理解の様子やテストの解答について教えてもらったり、母語がわかる職員からは子どもたちの母語でやりとりの力や読み書きの力の様子を教えてもらったりもする。子どもの日本語能力をみんなで判定していくと、「もっとやりとりをする機会をつくったほうがいい」「友だちとの関わりを増やせるように、クラス遊びなども工夫していこう」「保護者にも継続的に連絡をとるようにする」など、具体的に次の関わり方を変えたり意識してみることにつながりやすい。教職員がそれぞれの立場を活かして子どもたちの様子を出し合うことで、自分の気付いていなかった子どもたちの一面を知り、様々な角度から話し合ったことを授業改善や学級経営にも活かすことができる。今回も判定結果を受けて、校内の日本語指導の体制をより子どもに合ったやり方に切り替える

ことができた。一人ひとりの子どものことばの力を把握していくには時間がかかるが、子どもの力を伸ばしていくために「この話し合い、必要だよな」と実感できるような会議であれば、校内の体制の中にもしっかりと位置付けていく。本校において、JSLバンドスケールは全教職員で外国につながる子どもたちの教育を考えていくための大切なツールであり、JSLバンドスケール判定会議で話し合うこと自体が、指導や支援について協働で考える研修の場になっている。

2.2 実践の発信をする

「未来に向かって」は、日本語指導教室に通室する5、6年生が「自分について」「将来について」などを周りの人たちとともに考える取組である。本校の外国につながる子どもたちは海外から転編入してくる児童も多く、特に高学年になると日本語で行われる授業が理解できないことや友だちとのコミュニケーションの難しさから、進学や将来について不安を感じたり悩んだりしている子が多い。将来のことを考える機会が少なく「身近に夢をもって努力しているモデルがない」「日本の社会や職業についての具体的な話を聞く機会が少ない」といった実情から、子どもたちに必要な取組は何かと考え、取り組み始めたのがこの「未来に向かって」の実践である。

年間を通して在籍学級での学びとつなげて学習を行っているが、2020年度は主に行事や学年と多文化共生の学習をつないで活動を行った。そして、この「未来に向かって」の授業を公開し実践を発信することを通して、みんなで「どのような日本語教育を目指していくか」を考える機会にした。

「未来に向かって」の取組は、今年度、自分について考える活動から入り、行事と関連付けて行った。本校では運動会で多言語のアナウンスをしており、6年生のポルトガル語とスペイン語を母語とする児童がアナウンスを務めた。学校の中では日本語で学んでいるため、みんなの前で母語を話す機会は少ない。自分の母語に自信がもてず、みんなの前でアナウンスすることに不安を感じる児童もいる。今回もアナウンスをすることを躊躇する児童がいた。担任や保護者にも協力してもらいながら、本人が「やってみよう」という気持ちになるように、時間をかけて話し合いを重ねた。当日はみんなの支えもあり、アナウンスの仕事をやり遂げることができた。何よりも周りの友だちの「上手だった」「スラスラ話してとってもすごい」という肯定的な反応が自己肯定感につながっていく。6年生が1年間の取組を振り返った時、最初母語でアナウンスをすることに前向きではなかった児童が「ポルトガル語で放送をしてよかった」と話した。そして応援してくれた親にポルトガル語で手紙を書くためにポルトガル語のわかる先生に文章の書き方を教えてもらっていた。母語でのアナウンスに取り組む過程で、母語の力や保護者の思いに気づき、自分のルーツに向き合うきっかけとなっている。

また、将来について考える活動は学年の学習とつなげて行った。6年生の後半になると在籍学級でも将来について考える機会が増えてくる。そのような機会を活用しながら、興味のあることや好きなことを出発点にして、将来のことを仲間とともに考えてきた。2020年度は、就職が決まった外国につながる本校の卒業生に「名前や国籍のこと」「苦勞したこと」「将来の夢」などについて語ってもらえる機会を得た。身近な先輩が就職活動をす

るときに国籍について悩んだことを知り、「近い将来、自分も経験するかもしれない」と感じた児童もいた。自分のルーツに誇りをもって前に進む姿に勇気をもらい、「英語の先生になりたい」「フライトアテンダントもいい」と、様々な職業に興味を持ち始めた児童もいた。在籍学級の授業の中で考えていくことで、周りの友だちが「外国人のことをどう捉えているのか」「差別についてどう考えているのか」などを知り、「国籍で差別されるなんておかしい」と感じている友だちの思いに気づくことができた。仲間とともに現実に向き合いながら、考えたことを周りに発信し、将来の夢を考え始めている子どもたちをみると逞しさを感じる。小学校の高学年段階ではまだ具体的な目標はもっていないが、「まだわかりません」と言いながらも自分の今の考えをことばにして表現したり、周りの人からコメントをもらったりする経験は、次の段階に進むエネルギーになっているようである。

3. 日本語教育の実践者として

私は日本語指導教室の担当として外国につながる子どもたちへの教育を校内の教職員と連携しながら進めてきた。校内での日本語指導の体制づくりを実践してきて、日本語教育の担当者が学校の現状を把握し、必要な取組を提案することの大切さを感じている。例えば全市的な取組としてJSLバンドスケールが導入されていたとしても、校内でJSLバンドスケールの意義を正しく理解し、指導や支援に活かそうと中心になって発信していく人がいなければ校内の体制づくりは進んでいかない。教職員がどんどん入れ替わる学校現場だからこそ、取組の目的や意義を丁寧に伝えていくことが求められる。途切れない指導や支援を可能にするためにも、協働で把握し、つきたい力や願いを共有し引き継いでいけるような体制整備が必要なのである。

また、授業実践を発信することの大切さも感じている。授業公開や実践事例の発表がそれにあたる。授業公開をする際には活動案を事前や事後に検討する。JSLバンドスケールの会議や研修等で確認してきた外国につながる子どもたちの教育に必要な視点が、授業者の働きかけや声かけとして表れているか、子どもたちの言語活動の姿として表れているかをみんなで考える機会となる。自分では気付いていなかった視点を教えてもらえることもあり、学ぶことは多い。取組全体を実践事例として発表する際には、長期的な子どもの変容を捉えながら活動を振り返り、成果や課題を整理して伝えることが中心になる。日本語教育の実践と聞くと、国語の授業につなげた実践をイメージすることが多いかもしれないが、学校での活動全体を日本語教育の視点で見ると、様々な教科の授業や行事が日本語の学びの場になることに気づく。多様な言語活動によって子どもたちがいきいきと授業に参加する姿を見ることができたり、ことばの力を伸ばすことにつながっていることをみんなで実感できたりする。実践を発信し共有することは、自分自身はもちろん、周りで関わってきた教職員の次の実践につながる大切な研修の場になっていると感じている。

4. まとめ

私は大学の教員養成課程で学んだことと大学院で年少者の日本語教育について専門的に学んだことを合わせながら、現在の日本語教育実践に活かしている。鈴鹿市の小中学校でも文部科学省が定める学習指導要領に沿って教育活動を行い、「特別の教育課程による日本語指導」を実施しているが、外国につながる子どもたちの教育に携わると、市内であっても地域、学校、学級によって、その年によって、様々な要因が重なり合い変化することを実感する。常に「目の前の子どもたちにとって必要な指導や支援は何か」と考えなければならぬ学校現場の状況を考えると、各校に多文化共生教育や日本語教育の担当が位置付けられている鈴鹿市は発信や共有をして学び合う体制ができているといえる。

市内や校内に向けて日本語教育について発信する実践者となった時、拠り所となったのは大学院で学んだ理論や実践、そして共に試行錯誤して積み重ねてきた実践経験である。大学院生として関わる実践の場と日本語教育の担当者としての実践の場では色々な面で異なるが、「どんな日本語教育を目指すのか」という土台の部分はつながっている。多くの日本語教育実践から多様なアプローチの仕方に気付かされ、「ことばの力の捉え方」「母語の大切さ」「関係性の中で育まれる言葉」「意味のあるやりとり」「アイデンティティ」「キャリア教育の視点」など、キーワードのようにして自分の中に残っている学びが、今、目の前にいる子どもたちと創る授業に結び付いたり、会議や研修の場で話し合う視点になったりしている。

公立の学校現場での外国につながる子どもたちの教育は、これからも社会の情勢に大きく影響を受けるであろう。変化が多い時代だからこそ学校や子どもたちの実態を把握し、子どもたちにどのような力をつけていくのか、大切にしていく視点は何か、そのために必要な体制や指導・支援は何なのかを市全体や学校全体で考えていくことが求められる。中心となって日本語教育を推進する日本語教育コーディネーターや日本語教育担当者が専門的な新しい理論や実践を学べ、それを日々の授業に取り入れる実践の場があること、そしてそれを協働で検証していく場があることで、日本語教育の実践は充実していくと考える。

参考文献

- 川上郁雄 (2011) 『『移動する子どもたち』のことばの教育学』くろしお出版
 川上郁雄 (編) (2006) 『『移動する子どもたち』と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える』明石書店
 川上郁雄・尾関史・太田裕子 (2014) 『日本語を学ぶ／複言語で育つ—子どものことばを考えるワークブック』くろしお出版
 細川英雄・太田裕子 (編) (2017) 『キャリアデザインのための自己表現—過去・現在・未来を結ぶバイオグラフィ』東京図書
 文部科学省 帰国・外国人児童生徒教育情報 <https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003.htm> (2021年2月28日アクセス)

(なかがわ ともこ 鈴鹿市公立小学校)